

愛に目覚めた冷徹社長は生涯をかけて執着する

## 目次

愛に目覚めた冷徹社長は生涯をかけて執着する

5

愛しているという言葉では足りない感情

277

愛に目覚めた冷徹社長は生涯をかけて執着する

## プロローグ

「ごおお、ごおお。」

午後八時十五分。夜の地下鉄ホームは、様々な装いの人々で溢れていた。イヤホンを耳にはめ、音楽を聴く学生。

疲れた顔でスマートフォンをいじるサラリーマン。

そして、昏い面持ちで俯く、河原志緒。

「ごおお、ごおお。」

志緒の目の前に延びる線路の先は、先の見えない真つ暗なトンネルに繋がっている。

先ほどから志緒の耳に届く風のような音は、地下鉄の走る音なのだろう。

駅構内に、聞き慣れたメロディーが響き、次いでアナウンスが流れる。

『まもなく回送列車が通過します。危ないですので、白線の内側にお下がりにください』

「ごおお、ごおお、おおお。」

暗かったトンネルの奥から、ふたつの光が見えてくる。それはどんどん近づき、まぶしく志緒を照らした。

その時——

「危ない！」

唐突に響く声。引かれる右腕。たたらを踏む足。

志緒の目の前を、地下鉄が勢いよく通り過ぎていく。そして自分の右腕は痛いくらいに握られてくる。

志緒のすぐうしろで、荒く息を刻む音が聞こえた。

「あなたは——」

志緒は振り向いた。そこには、いつになく怒った顔をした男が立っていた。

彼の名は、七海橙夜。

会うたびに甘い言葉をかけてきては志緒を翻弄する、取引会社の社長だ。

常に強気な笑みを浮かべている七海は、今は恐ろしいほどに思い詰めた表情をしている。

真剣な眼差しで見つめられて、志緒の心はどきんと大きく音を立てた。

——どうして？ 私、動揺している。

志緒は自分の心に戸惑った。しかし、誰かがその戸惑いの理由を教えてくれるはずもない。

まるで自分と七海だけ時間が止まってしまったみたいに、ふたりは動くことなく……

ただ、周りでは大衆が忙しそうにホームを歩き来していた。

それは風の強い日だった。その風に流されて、小雨が降っていた。

十月の初め。街路樹が葉を朱く染める秋の季節。

志緒の祖母が息を引き取った。享年七十三。長きにわたる闘病の末だった。通夜を経て、しめやかに告別式が行われた。次の日。志緒はひっそりと家を出た。

見送る人は誰ひとりいない。両親に別れを告げたところで、無視されるだけだろう。手に持つのは、自分の私物が入ったスーツケース。最後にと、志緒は自分の生まれ育った家を見上げた。

この家には、志緒と祖母が楽しく過ごした思い出がたくさん詰まっている。しかしそれ以上に、辛い思い出のほうが多かった。

ゆえに家を出るのだ。祖母が旅立った以上、思い残すことはない。

志緒は黙ったまま、この家と決別する。

——さようなら。

そう心の中で呟き、家に背を向ける。

「あら、やっとこの家を出てくれるの？」

突然、うしろから声をかけられた。ころころと、鈴を転がすような可愛い声。だけど志緒にとつては、心に錘がずしりと落ちるような憂鬱さに満ちた声。

志緒はゆつくりと振り向く。

するとそこには、高級ブランドのワンピースを着た女性と、背の高い男性が立っていた。

妹の愛華。そして、愛華の婚約者である元敬だ。

「まあ、今日中に出て行つてくれなきゃ、パパとママが追い出すって言っていたけどね。あのうるさいばあさんが死んで、あなたが消えてくれる。今日はなんてステキな日なのかしら」

ニコニコと笑顔で、ひどいことを口にした。

彼女は、祖母が亡くなったことを心から喜んでいいるのだ。彼女だけではない。両親も『ようやく死んでくれた』とはしゃいでいる。

悲しんでいるのは志緒だけだ。実の息子である父親すら祖母の死を望んでいたなんて、胸が痛くなる。

「さようなら、お姉ちゃん。どこに行くのか知らないけど、せいぜい不幸になりますように」

笑顔で呪詛を口にした。どうして実の妹にここまで憎まれなければならないのか。志緒は、愛華の思考がまるで理解できなかった。

それに、彼女の隣に立つ男、元敬——

心底侮蔑したような目でこちらを見る彼は、かつては志緒の婚約者だった。

しかし志緒は彼から、一方的に別れを告げられたのだ。その理由はいまだにわからない。彼の思

考もまた、志緒には理解できなかったということなのだろう。

だから、もういい。もう、関係ないのだ。

自分はここから去る。幼少の頃から志緒のものをすべて奪い続けた妹も、志緒を捨て、なぜか嫌悪の感情を向けるようになった婚約者も、そして、愛華を溺愛し、姉である志緒を虐げてきた両親も。

皆、さようならだ。二度と会うことはない。

志緒は無言で前を向き、スーツケースを引つ張って歩き出す。

勝ち誇ったような愛華の笑い声を背に、志緒は生まれ育った家を発つ。

空を仰ぐと、薄暗い雲が厚く立ち込めていた。

それは今の志緒の心を映したみたいに、今にも泣き出しそうだった。



河原志緒は今年で二十四歳になる社会人だ。交じりけのない真っ黒な髪はセミロングで、仕事時はサイドの髪をうしろでまとめてバレッタで留めている。顔の造りは、とろりと目じりの下がった垂れ目以外は特徴らしいところもなく、全体的に大人しそうな風貌をしている。

いつもと変わらない。志緒は今日も静かに、黙々と仕事を片付けていた。

窓の向こうは、さあさあと静かに雨が降っている。

秋の長雨とは、九月の中旬から十月の上旬までの天候を言うが、今年はいささか長引いているようだ。十一月に暦が変わってもなお、しとしとと雨は降り続けている。

今日は水曜日。時刻は午前十時五分。志緒は社長室で雑務をこなしていた。

社長宛のファックスをチェックし、トレーに分けて入れる。社長にアポイントが入れば、本人に確認してからスケジュールを調整してねじ込む。

志緒の仕事は、人材コンサルティング会社を経営する社長の秘書だ。

会社の規模は中小企業のレベルだが、派遣する人材の質がよいと評判で、取引の依頼は年々増える一方である。

そんな会社を切り盛りする社長は、もちろん多忙な毎日を送っている。社長が少しでも動きやすいように先回りして整えるのが、志緒の主な仕事だ。

志緒は手に持っていた書類の束をトントンと整えて、ふうと息をつく。

手首には、祖母の形見である腕時計がはめられており、時を刻んでいた。

志緒は眉根を寄せ、腕時計を見つめる。

家を出て、小さな単身用アパートに住み始めて、一ヶ月。

結論から言えば、志緒はまったく祖母の死を乗り越えることができずにいた。

なにをしても、ふとした拍子に祖母を思い出してしまふ。

そのたびに落ち込み、形見の腕時計を握りしめて泣く。

食事をしてもおいしくない。そもそも空腹を感じないから、食べたいという欲求が湧かない。

自分でも意味のない感傷だとわかっている。いつまでも前に進めない、弱い己に嫌気が差す。こんなはずじゃなかった。あの家を出たら、もっと前向きに生きることができるとは思わなかった。

志緒は今日何度目かわからないため息をつく。

その時、デスクの電話がプルルと鳴った。

「はい。株式会社インリソースです」

『ああ、河原さん。ちょうどよかった。占部だけど』

「はい。どうかしましたか」

志緒はすぐさま気持ちを切り替え、胸ポケットからペンを取り出した。

占部とは、志緒の直属の上司だ。つまり、社長である。

太り気味なことを気にしている温和な性格の中年男性で、洞察力は人一倍優れている。その辺りは、さすが社長といったところだろうか。

『実はちょっと打ち合わせが長引いて、戻りが少し遅くなりそうなんだ。それで次の予定なんだけど、もうすぐ七海さんがいらつしやるはずだよね？』

「はい。十一時にお約束していますから」

スケジュールを確認しながら志緒が答える。

『悪いけど、お昼の一時には戻れると思う。こちらからも先方に謝罪の電話を入れておくけど、待って頂きたいんだ。うまく対処してくれるかな』

「わかりました。お引き留めしたらよろしいんですね」

『頼むよ。それじゃあ、あとでね』

占部はそう言つて、電話を切った。志緒も受話器を置き、早速応接室の準備を始める。窓を開けて換気し、軽くモップをかけて、テーブルをふきんで拭いた。

「インターネット環境、筆記用具、メモ帳、貸出用タブレット……うん、揃ってる」

今更確認する必要もないものばかりだが、万が一、足りなかつたら失態である。念のためのチェックを済ませた志緒は、給湯室でお茶の準備にとりかかった。

そこまで終えたところで、十時五十分。約束の十分前に総務課より来客の連絡が入る。志緒は戸棚に入れていた新品のタオルを手を持ち、小走りで階段を降りた。

ロビーに到着すると、そこにはとても目立つ男がひとり、立っていた。

彼は志緒に気づき、笑顔を向ける。

「やあ、おはよう」

「いらつしやいます。お待ちしておりました、七海様」

志緒はお辞儀をして七海を出迎えた。

七海橙夜。彼はたびたびここを訪れては、社長と商談を交わしている。秘書である志緒とも顔見知りだった。

彼の髪は一見黒なのだが、光に照らされると赤茶色に輝くことを志緒は知っている。短髪をさらりとうしろに撫でつけた髪型と強気な眼差しは、常に溢れんばかりの自信に満ちている。

意志の強そうな吊り目で、きりりとした精悍な顔つき。高い鼻梁。相貌は非常に整っていて、お

まげに色気まである。

体格がよく、背も高いため、海外ブランドのビジネススーツがよく似合っていた。野性的な雰囲気醸しながらも、立ち居ふるまいに品があり、常に人の視線を引きつけてやまない。

まさに、王者という言葉が似合う男性だ。二十八歳という若さながら、そのカリスマ性に誰もが惹きつけられる。彼はビジネス雑誌で、たびたび新鋭の注目プレジデントとして表紙を飾っていた。占部とお約束していた件ですが、ただいま先客との打ち合わせが長引いております。ここへ到着するのは一時頃になりそうで、申し訳ございません」

「ああ、聞いているよ」

七海は笑みを浮かべているが、志緒は愛想笑いのひとつも見せない。

「もし、七海様のご予定が詰まっていなかったら、占部が到着するまで待つて頂きたいとの伝言を預かっています。お願いできますでしょうか？」

「それくらいなら大丈夫だよ」

「ありがとうございます。では、ご案内いたします。傘は、こちらでお預かりします」

外は雨だ。七海は濡れた傘を持っていて、雨雫が床に水たまりを作っている。

「ありがとう」

七海が志緒に傘を渡す。それと交換する形で、志緒は彼にタオルを渡した。

「肩が濡れていますよ。これをお使ください」

「至れり尽くせりだな。もしかして、このタオルは君のもの？」

ふかふかのタオルを手に、七海が爽やかな笑みを見せる。

なぜそんなにも嬉しそうなのだ。志緒は、そっけなく言葉を返した。

「いえ、悪天候の時にいらっしやったお客様には、いつもお渡ししている新品のタオルです」

大体、客人に私物を渡すなど非常識である。

なにを言っているのやら、と思いつながら、志緒はクルリと七海に背を向けて歩き出した。

「なんだ、残念だな。俺だけの特別扱いかと期待したのに」

心底落ち込んだように、これみよがしなため息をつく。

志緒は彼の前を歩きながら顔をしかめた。彼は初対面の時からこんな調子で、志緒に思わせぶりなことばかり言うのだ。正直言って、どんな対応をするのが正解かわからず、志緒はいつもだんまりを決め込んでいる。

（まったく。七海様ほどの会社に行っても、こんな風に女性に声をかけているのかしら。女たらしと思われても仕方がないわね）

「軟派で、軽くて、言動が冗談っぽい。女癖も悪そうだ。そんな風に思ってる？」

心の内で思っていたことをびたりと当てられて、思わず志緒は足を止めた。

うしろを向くと、七海がニヤリと勝ち気な笑みを浮かべている。

「凶星？」

「いいえ」

志緒は短く否定して、ふたたび廊下を歩き出す。

「残念だが、君だけだよ。俺は河原さんに特別扱いされたいから、こういう風に言うんだ」  
七海が本気が冗談か判断しづらいことを言う。

志緒は無言を貫くしかない。

（もう、本当に七海さんは苦手だわ。さつさと応接室に案内して、自分の席に引っ込もう）  
こういった手合いは、非常に対応に困るのだ。

志緒が階段を上つて廊下を歩いている間にすれ違う社員は、誰もが七海を見た。特に七海は女性の人気がとて高いため、彼見たさにわざわざ廊下で待ち構えている人もいるようだ。

七海はアーベルトラストというIT関連の企業を経営する、代表取締役だ。企業向けの情報インフラの提案、そして構成、整備などを手がけていて、新興企業ながらも二年前に上場し、その株価は順調に上昇している。投資家からも他の企業からも、大変注目されている会社と言えるだろう。そんな企業の敏腕社長で、しかも顔がいい。仕草にも品があり、紳士的。……となれば、憧れな

い女性のほうが少数だ。きつと彼は、多くの女性に声をかけられ、憧れられているのだろう。  
だが、志緒と言えは、その少数派に類するほうだった。仕事だから仕方がないけれど、本当は、できるだけだけ顔を合わせたくない。

志緒は応接室の扉を開け、七海を通した。

「こちらでお待ちください」

「ありがとうございます」

「WiFi環境は整っております。筆記用具やノートは、ご自由にお使いください」

ぺこりと頭を下げ、一旦応接室を出る。志緒はその足で給湯室に向かい、彼のために用意していたお茶を淹れた。そして応接室の扉を二度ノックして、ふたたび室内に入る。

ソファに座る七海の前に、温かいお茶を置いた。

「ああ、心が落ち着くいい香りだね。これはハーブティかな？」

「以前、占部から、七海様はハーブティを好まれると聞きましたので、用意いたしました」

「ふうん？ そんなことを言ったかな。占部社長も、そして君もよく覚えていたね」

七海はハーブティの香りを楽しんだあと、ゆっくりと飲み始める。

「ちなみに、このハーブティのチヨイスは誰が？」

「私です。お好みに合わないようでしたら、別のものを淹れ直しますが」

「いや。今の俺にぴったりのハーブだったから驚いたんだ。河原さんはハーブに詳しいのか？」

七海に淹れたハーブティ。それは『エゾウコギ』という薬草を使ったものだ。シベリア人参とも呼ばれる植物で、疲労回復と集中力を高め、また、体を温める効果もある。

「特別詳しいわけではありません。七海様がお好きだと伺ったので、少し勉強はしました」

「へえ、それは嬉しいね。是非とも、ふたりで色々なハーブを試してみたいな。どうか？ 今度の休みにでも」

「暖房を効かせていますが、今日は一段と寒いです。よかつたらお使いください」

七海の言葉を遮るように、志緒は彼にブランケットを渡した。くつくつと七海は肩を震わせて笑い、志緒からブランケットを受け取る。

「まったく、反応が可愛いなあ」  
びしっと志緒の額に青筋が走る。思わず素に戻って睨んでしまつたら、七海は慌てて手を横に振った。

「怒らないで。ただの本心だよ」  
「……七海様」

「この会社は君がいるから、いつも優しい気遣いに溢れているね。俺に言わせれば、君のような秘書さんがいると勘違いするお得意さんが続出しても不思議はないよ？」

「仰っている意味がわかりかねます」

志緒はムツと眉間に皺を寄せた。七海は勝ち気な吊り目で志緒を見つめる。

「俺なら期待してしまふ。こんなにも自分を気遣ってくれるんだ、もしかしたら好意を持ってくれているのかなってね。そんな男は本当にいない？」

七海は形のよい目を細める。口元には笑みを浮かべているが、目が笑っていないように感じるのは気のせいだろうか？

志緒はよくわからない居心地の悪さを感じて、ふいと七海から視線を外した。

「私にそういった類の冗談を仰る方は、七海様くらいしかいません」

「そう。それはよかつた。あと、冗談ではないから、そこは訂正しておいてくれ」

さらりと、困り果てることを言う。

こういうところが、好きではないのだ。多くの女性はこういう風に言われたら頬を染めるのかも

しれないが、志緒はどうにも苦手だった。軽薄に思えるし、自惚れに見えるほどの自信家ぶりに辟易してしまう。そうは言っても、彼が持つ自信は実績に裏打ちされたものだ。

しかし志緒は、七海の成功者たる堂々とした態度がだめだった。なんと言うか、キラキラしすぎている、近づきたくない。

だから志緒は、あからさまに話題を変えることにした。

「七海様。昼食はいかがなさいますか。よろしければお弁当やデリバリーを用意いたします」

「ああ、そうだな。今日は外で済ませる予定だったけれど……」

ふむ、と七海は腕を組み、悩んでいる様子で目を閉じる。そして、妙案を思いついたというように顔を上げた。

「そうだ。一緒に食べないか？」

「はっ？」

志緒は思い切り訝しんでしまつて、七海がクスクスと笑う。

「なんだ。そんなに嫌うことないだろう。この辺りには詳しくないから、君のおすすみを教えてもらえると嬉しいんだけど」

志緒はむむつと眉間に皺を寄せた。せっかく話題を変えたのに、また蒸し返すつもりなのか、この人は。

（本当に勘弁してほしいわ。なんのつもりなのかしら）

七海に憧れる女性はそれこそ星の数ほどいるだろう。彼と外で昼食なんてしたら、たちまち社内

で噂になることは想像に難くない。いかに自分が人の視線を集めているのか、彼には少し自覚してほしい。

「申し訳ございませんが、私は昼食を用意しています。おすすめの食事処をお教えることはできませんので、少々お待ちください。それでは失礼いたします」

志緒は丁寧にお辞儀をして、さっさと応接室を出る。

「はあ」

ドツと疲れた。やっぱり何度会っても、七海という男は苦手だ。

女性の扱いに慣れている感じがするところも嫌だし、恋愛を遊びと同等と考えていそうな気軽さも好きになれない。

(彼の目为本気に見えたりすることもあるけど……いや、本気なわけない。あんな風に言つて、困惑する私の反応を楽しんでいるんだわ)

そう自分に言い聞かせる。なぜなら、七海のようになんでも持つていて、その気になれば女性もよりどりみどりの男性が、自分に本気になるわけがないからだ。

(私は、あの優しかった元敬さんにさえ嫌われてしまうんだもの。好きになられる要素なんてない)

かつての志緒の婚約者を思い浮かべる。

両親と妹に虐げられて、なにかかも奪われていた日々。幼少の頃から罵声と蔑みの言葉を浴びせられていた志緒は、すっかり大人しく、自尊心の足りない人間になっていた。

そんな志緒に声をかけ、優しく接してくれたのが、元敬だ。

大学のキャンパスで出会い、不思議と気が合つて、たちまち仲良くなった。

大学四年の秋。卒業したら結婚したい——そう言ってくれた時は涙が出るほど嬉しかった。ようやく自分はある家を出て、幸せになれるんだと。

しかし、その幸せは長く続かなかつた。

彼の軽蔑しきつた冷たい瞳と、妹の勝ち誇つた顔を思い出す。同時に、幼い頃からずっと聞き続けてきた両親の言葉も……

『根暗で陰湿な性格。おまえはまったく可愛くない。おまえは誰にも愛されない——』

志緒は首を横に振つて感傷を振り払つた。

そして食事処のリストを七海に手配し、昼休みのチャイムが鳴るまで黙々と仕事を続けた。

志緒はいつも昼食を休憩室で取るのだが、外の空気を吸いたくなくなってしまい、近くの公園に赴く。朝に降っていたはずの雨は、もうやんでいいた。

厚く、どんより空を塗り潰していた雲は幾分か薄まり、わずかながら太陽が顔を出している。空気はひんやりして、キリリと目の醒めるような晩秋の風が志緒の頬を撫でた。

人ひとりいない寂しげな公園にあるのは、ベンチの他にはブランコと滑り台だけだ。濡れた砂利を踏みしめて屋根の下の木のベンチに座る。

膝に置いたのは、自作の弁当。包みをほどき、弁当の蓋をカッと開ける。

箸を手に取り、いただきますと小さく呟いた。

しかし、なかなか一口目に進めない。何度もため息をついて、食べなきゃ、と自分に言い聞かせて、無理矢理卵焼きを口に放り込む。

「……味がしない」

もちろん味つけはしている。それなのになぜか、気分が悪くなる。無理に咀嚼そじやくしてごくりと呑み込み、ペットボトルのお茶を飲んで気分を紛まぎらわせた。

ここ一ヶ月の間、志緒の食生活は散々だった。手作りをしても、はたまた外食をしても、おいしく感じられない。味覚が恐ろしくらいに鈍だまってしまっていて、食欲も湧わかなかった。

だが、栄養を取らなければ倒れてしまう。仕方なしに、志緒はカロリーバーを口に詰め込み、サプリメントで栄養を摂取するという毎日を過ごしていた。しかし、それではあまりに不健康なので、久しぶりに弁当を作ってみたのだが、このざまである。

「おばあさま……」

慕したっていた人の名を呟くと、涙がじわりとにじむ。

——落ち込むのはやめよう。いつまでも泣いていたら、おばあさまが天国から叱しかつてきそうだから。そう思っているのに、まったく前に進めていない。祖母の分も生きると決めたのに、志緒の気力は減る一方だ。

志緒にとつて、祖母は愛を知るすべてだった。志緒はなぜか、物心つく前から両親ふたごに疎そまれていて、妹が生まれたあとは、その態度がさらに露骨ろこつになって……

——姉妹間での、明らかな待遇の違い。志緒だけ食事を与えられない日もあった。しかし志緒が虐いたげられると、いつも同じ敷地内に住む祖母が志緒を守ってくれた。両親は祖母には頭が上がりなかつたらしく、祖母が叱しかれば渋々志緒の待遇を改め、嫌々ながらも食事などの最低限の世話はした。それでも、志緒が小学生になる頃には食事は別になり、志緒はいつも祖母の住む離れで、ふたりで料理をして、食べていた。

志緒に冷たい両親を見て、妹の愛華は『姉は虐いたげてもよい』と学習したのだろう。妹による姉への嫌がらせはエスカレートする一方だった。姉が手にするものは、すべて自分のもの。志緒の持ち物を愛華がほしがれば、妹の味方をする両親が、手段を選ばず奪い取る。そうして、志緒は自分が手にしたなにかもを妹に取られ続けた。友達からの誕生日プレゼントも、初任給で購入したネックレスも、すべてだ。

志緒にとつて味方は祖母ひとりだけ。あの冷たい家の中で、唯一志緒が安心する場所。それが祖母の傍そばだった。

実の母親よりも母らしく接してくれた大切な人を失った志緒は、こんなにも孤独を感じて、いまだに悲しみから抜け出せずにいる。

志緒は自分の弁当箱を見つめた。何度見ても、おいしそうに見えない。

肩を落とす、傍そばに置いていた弁当箱の蓋ふたを取る。しかしその時、ヒョイと蓋ふたが奪さらわれた。

「えっ!？」

「へえ、手作り弁当か」

ベンチのうしろから現れたのは、七海だった。

なぜ七海がここに!? 志緒が驚きに目を見開いている間に、七海は志緒の隣にどっかりと座る。

「食事に行こうと外に出たら、君のうしろ姿を見かけたものでね。あとをつけたんだ」

「あ、あ、あとをつけたって、どうして」

「そりゃ、少しでも君の傍にいたいからに決まっているだろ。ところで、食べないのか?」

人差し指で弁当を指す。

——傍にいたいってどういうことだ。あとをつけたって、そんなストーカーみたいな真似をしたのか。大体、いつから志緒を覗き見ていたのだ。

ぱくぱくと口を開け閉めしながら様々なことを一度に考えた志緒は、唐突に我に返る。

「た、た、食べません」

「え? これで昼食は終わりとか言わないよな?」

「食欲がないんです。私のことは放っておいてください。この辺りのお食事処のリストはお渡ししたはずですよ」

「それより、その弁当。片付けるなら俺にしてくれないか?」

「はあ!」

志緒は思わず素っ頓狂な声を出して、顔をしかめた。すっかりビジネス用の顔を忘れていた。

「お断りします。七海さんのお口に合うようなものではありません」

口早に言っつて、弁当を片付けようとした。しかし、今度は弁当箱が奪われる。

「ちよっ……!」

「いただき。箸、借りるぞ」

七海は志緒の箸を使っつて弁当を食べ始める。志緒が慌てる中、彼はバクバクと、いつそ小気味良いいテンポで食べ進めた。

「うん、うまいな。これ、ピーマンにじゃこがまぎっているのか」

「え、ええ。それはピーマンとじゃこのおかか炒め……ではなくて!」

「これは鶏の照り焼きだろ。なかなか凝ったメニューじゃないか」

「別にそれは、つけおきしたものを朝焼いただけです」

「ふうん、いいね。河原さんは料理上手か」

ニコニコして、彼は弁当箱に入っつていた俵おにぎりを口にすする。

「またひとつ、君を知ることができた」

「なぜ、そんなに嬉しそうなんですか」

「君を知ることが、最近の俺の趣味だからね」

「は、はあ……?」

思わず体を引き、啞然としながら七海を見る。すると七海はニヤリと横目で志緒を見た。

「さて、俺はどこまで河原さんを知っているでしょう?」

「し、質問の意味がわかりかねます。七海さんにとっつて私は、取引先の社長秘書であり、それ以上のことは知るすべがないと思います」

「フフ……。まあ、普通はそう思うだろうな。いや、そう思いたいのかな？」

意味深な言葉の口にして、彼はカラになった弁当箱を閉じ、志緒に差し出した。

「うちそうさま」

この場合、『おそまつさまでした』と言つべきか『勝手に食べるな』と怒るべきなのか。

志緒は結局なんにも言い返すことができず、黙つたまま、弁当箱をクロスで包んだ。

「人のお弁当を取らなくても、おいしいお店がたくさんあるのに」

思わずそんな減らず口をたたいてしまうと、七海はクッククツと軽く笑った。

「もう食べる気がなかったんだろ？ 弁当は傷みが早い。せっかく作ったのに捨てるんじゃ、もったいないじゃないか」

「それはそうですね」

正直なところ、食べてもらえて助かった。食べ物捨てるのは心が痛むし、朝に弁当を作った労力も無駄になる。

「まあ、食欲が湧かなくても、なにか腹には入れておいたほうがいいぞ。いい仕事は、充実した食生活があつてこそだからな」

ぼんぼんと志緒の肩を軽く叩き、七海は公園を立ち去る。

志緒は眉間に皺を寄せたあと、ため息をついた。七海と話していると、妙に疲れてしまう。終始彼のペースと言おうか。

やはり、できる限り関わりたくないタイプだ。

志緒は腹に手を当てたが、やはり食欲は感じられない。もう、今日の昼食は食べなくてもいいだろう。志緒は元氣のない足取りでのろろと会社に戻り、総務課の自席についた。

「え、これは、なに？」

驚きに目を丸くする。なぜか自分のデスクの上に、有名なジュース専門店の野菜のスムージーと、可愛らしくラッピングされた焼き菓子の包みが置いてあったのだ。

「もしかして……七海さん？」

先ほどの弁当のお返しだろうか。

そうだとすれば、志緒が公園から会社に戻るまでの間に、七海はこれらの店に行つて購入したということになる。なんというフットワークの軽さなのだ。しかも周りにいる女性社員が騒いでいないということは、他の社員が戻る前にすばやく置いたのだろう。よその会社でそこまでするとは、呆れを通り越して思わず感心してしまう。

志緒はなんとなくスムージーを手を取った。

「変な人」

ぼつりと呟く。どうして七海が自分に興味を持つのか、まったく理由がわからない。

(遊び……暇潰し。そう考えるのが妥当ね。あまり深く考えないようにしよう)

自分はいくまで、七海の取引先に勤める一介の秘書だ。それ以上でもそれ以下でもない。必要以上に関わらなければ、そのうち彼も飽きるだろう。

志緒はスムージーにストローを挿し、飲み始めた。トマトベースで、セロリの風味がみずみずし

い。ほんのりスパイスのきいた味はあとを引く。

「……ん。これは、おいしい、かも」

久しい感覚だった。なぜだろう。スムージーは素直においしいと感じた。



十一月も中頃になると、長かった雨はようやく終わりを告げる。代わりにやってきたのは、身が凍るような寒波だった。冬の足音が近づき、街を歩く人々の装いはあつという間に冬のものへと変わっている。

「河原さん、大丈夫？」

エアコンの効いた社長室。ファックスの仕分けをしていた志緒に、今日は社内で仕事をしていた占部が訊ねた。

「はい。社長のスケジュールですよ？ 一時間くらいなら今から外出されても問題ないかと」

「違う違う。君の体調を聞いているんだよ」

志緒は「え？」と目を丸くして、書類を持ったまま振り向いた。

占部はでっぷりした体を椅子に押し込め、人のよさそうな眼差しで志緒を見つめていた。

「この一ヶ月で、君はすっかり痩せてしまったし、顔色も悪いよ。ちゃんと寝ているかい？」

「心配をおかけして申し訳ございません。睡眠はできるだけ取るようにしています」

そう口にしながらかも、実のところは、あまり眠れていない。ベッドで横になると、どうしても祖母との記憶が蘇り、物思いにふけてしまうのだ。

——早く立ち直らなければ。早くしつかりしなければ。

心が焦るばかりで、まったく体はついてこない。

自分でも嫌になるくらい、情けなかった。これでは祖母に叱られてしまう。

思い詰める志緒を見て、占部は困ったように白髪まじりの薄い頭を撫でた。

「河原さん。無理しないで、休める時は休みなさいね」

「はい。お気遣いください、ありがとうございます」

志緒は頭を下げた。優しい言葉が心にしみる。声だけで人を和ませる力を持っているのが、占部の不思議なところだ。これも人徳なのかもしれない。

志緒が、トレーに入った書類を振り分けてファイルに閉じていると、占部に電話が入った。彼はしばらく会話をして、電話を終える。

「河原さん。すまないが、今日の五時にアーベルトラストの七海さんが来ることになったよ。至急人材マネージャーの予定を確かめておいてくれるかな。できれば君にも同席してもらいたい」

「かしこまりました。確認しますね」

志緒はパソコンで社内チャットを立ち上げ、マネージャーにメッセージを送った。そういえば、最近頻りに七海がやってくる。彼の会社で、たくさんの人手を必要とする大きなプロジェクトが動いているのかもしれない。

(そうだ。占部社長は今日の夜、会食の予定も入っているんだった)

七海との打ち合わせが何時に終わるかはわからないが、占部がスムーズに移動できるよう、手はずを整えておこう。

スケジュール表を眺めながら志緒が考えていると、占部がふいに話題を変える。

「ところでさ」

「はい」

「アーベルトラストの七海さん。どう思う？」

「……はい？」

そう言った自分は、相当訝しげな表情をしたのだろう。占部がおかしそうに笑う。

「はははっ。河原さんが僕の秘書に就いて一年が経つけれど、特定の人間にそこまで嫌そうな顔をしたのって初めてじゃない？」

「い、意味がわかりかねます」

志緒は気を取り直し、努めて冷静に対応した。しかし占部はニマニマと笑って頬杖をつく。

「いい男だと思わないかい？ 将来性は抜群にあるし、見た目もいい。更によろしく言えば、明治時代より続く財閥家の跡取りだし、なんとというか女性の理想を詰め合わせたような人だよな」

占部の言いたいことをなんとなく察する。志緒はこれ見よがしにため息をついた。

「誰もがあの人に夢中になるとお思いでしたら、それは間違いですよ」

「じゃあ、河原さんは嫌いなのかい？」

「別に嫌いではないですが、率直に言ってしまうと苦手です」

「そうかあ。七海さんだったら、僕も手放しで応援できるのになあ。彼は誠実な男性だよ」

ニコニコと占部が言った。志緒は書類を綴じ終えたファイルを持って、占部のデスクに置いた。

「そうでしょうか。お言葉ですが、誠実には見えませんね」

「おやおや。普段は温和な河原さんがめずらしい。きっと彼くらいだろうね、君がそこまで嫌悪感を露わにするのは。ふふふ」

からかうように言われて、志緒は呆れた顔をした。

仕事を終え、志緒は会社をあとにする。

腕時計を見ると午後八時。アーベルトラストとの打ち合わせ後に明日の会議に使われる資料をまとめていたら、いつの間にか終業時間を過ぎていた。

はあ、と吐く息は白い。空を仰ぐと、黒い空が広がっている。都会はきらびやかなネオンが美しいが、代わりに星は見えない。

志緒はコツコツとローファアの音を響かせて、人通りのまばらになった歩道を歩く。

そろそろ、繁華街ではクリスマスの飾り付けがされているだろうか。

(クリスマスか。確か、去年はおばあさまとターキーを焼いたっけ)

ふと、思い出す。去年のクリスマスに元敬から婚約解消を告げられたことを。困惑する志緒の前に愛華が現れて、元敬は自分の婚約者になったと、勝ち誇ったような笑顔で言った。

そんな元敬と、妹、そして両親の四人は、そのままクリスマスディナーに出かけていき、残された志緒は、祖母と一緒にクリスマスMASを過ごした。

『なんで、どうして。あんなにも優しい人だったのに。意味がわからないよ！ 私が、なにをしたというの。こんなやつてない。ひどいよ！』

泣きながらターキーを食べる志緒の背中を、祖母はずっと撫でてくれた。

『ごめんね。彼も結局、あの子たちにそそのかされてしまったのよ。だからもう、なにを言っても聞かないわ。志緒、あなたは——』

私が死んだら、家を出るのよ。

祖母はそう言った。老いてもなお強い眼差しで、志緒を見つめながら。

両親は実の娘である志緒を憎み、妹は姉を虐げることには愉悅を感じている。

志緒が手にしたものはすべて奪う。彼らの憎しみは本物だった。

ここまで憎まれる理由が志緒にはわからないけれど、祖母は言ったのだ。

——世の中には、血が繋がっているからこそ、憎しみを深める人たちがいる。だから、そんな人たちは離れたほうがいい。志緒の幸せのためにも、家を出るべきなのだ。

『私はもう長くないわ。だからね、志緒は今のうちに準備をしておくのよ』

祖母のアドバイスは悲しかった。彼女が不治の病におかされていることは理解している。命の刻限が近づいているからこそ、志緒はもう『そんなこと言わないで』とは口にできなかった。

河原家は、旧家の流れを汲む由緒正しい家柄らしい。祖母はその直系で、本家の当主だった。そ

れなりに資産があるとも聞いている。

『財を持つ人間はね、その財に見合う人格を持たなければならないのよ』

志緒はそう、祖母から教えられていた。

どんな時でも気丈であるように。余裕がない時こそ、品のあるふるまいを忘れずに。祖母は、その言葉を体現したような人だった。だからこそ、情けなく泣きすぎる自分なんて見せたくなかった。

志緒は、祖母が言った通りに、家を出る準備を進めた。

しかし祖母を亡くした今、志緒の心は迷子になっている。気丈にもなれず、品のあるふるまいができるはずもなく、生きる気力をすっかりなくして日々を過ごしている。

志緒が歩く歩道の先には、地下鉄の入り口があった。地下に向かう階段を進み、改札口をくぐってホームに降りる。

そこにはそれなりに人がいて、やがて来るはずの電車を待っていた。

スマートフォンを忙しそうに操作しているサラリーマン。

イヤホンを耳にはめて、音楽を聴いている学生。

志緒もそんな人混みに紛れ、ぼんやりと立ち尽くし、電車を待つ。

腹に手を当てたが、腹の虫が鳴いている様子はない。もう一ヶ月以上、空腹を感じない。

——このままではいけない。そんな逼迫した気持ちは常に抱えていた。

ごおお、ごおお、と、地下鉄のトンネルの先から、轟音が聞こえる。

聞き慣れたメロディーが流れて、回送電車のアナウンスが、ホーム内に響いた。

やがて黒いトンネルの先に光の筋がふたつ見えて、轟音が近づいてくる。その時だった。

「危ない！」

志緒の腕が突然握られ、力強く引かれたのは。

「え——？」

驚くままに、たたらを踏む。目の前では回送列車がごうごうと通り過ぎていく。

はあ、はあ、と、うしろで荒く息を刻む音が聞こえた。誰かが自分の腕を握っている。

志緒はうしろを向いた。

「あなたは——」

そこには、見たこともない怒りの表情を浮かべた七海が立っていた。

「七海……さん」

啞然として彼の名を呟くと、彼はぎゅつと腕を掴む手に力を込める。

「河原さん、なにをしているんだ」

「え、なについて、今から帰るんです。それよりも七海さんはどうしてここに？」

夕方の打ち合わせを終えてから、もう何時間も経っている。ここは彼の会社の最寄り駅ではないし、こんな場所で再会するのは意外だった。志緒が戸惑いながら訊ねるも、七海は答えない。その代わりに、ひどく辛そうな顔をする。

「君が……」

七海が呟いた。その時、アナウンスと共に地下鉄がホームに到着して、人々が忙しく電車を出入りする。

だが、七海と志緒だけは動くことはない。人々は、ふたりを避けて移動していた。

「君が、今にも線路に飛び込みそうに見えたんだ」

「私が？」

志緒は呆気にとられながら七海を見上げた。彼は眉間に皺を寄せ、志緒を睨んでいる。

志緒は、はあ、と思わず呆れたため息をついた。

祖母の死の悲しみに耐えかねて、飛び込み自殺をはかる？ ばかばかしい。自分は落ち込んでいるが、そこまで落ちぶれてはいないつもりだ。

「誤解です。手を放してください」

きっぱりと言って、手を振り払おうとする。しかし七海は手を放さない。

ムツと志緒はしかめ面をした。次はぞんざいに腕を振る。

すると、自分の体がよるめいてしまった。思わず「あっ」と声を上げ、倒れそうになる。

七海は志緒をしっかりと胸で受け留めた。そして、もう片方の手で志緒の背中を支える。

「足がふらふらじゃないか。まったく力が入っていない」

「大丈夫です。手を放してください」

「ちゃんと食べているのか？ 打ち合わせの時から心配だった。前に会った時よりも痩せているし、ひどい顔色だぞ」

七海が志緒の顎を摘まみ、くいと上げた。

「頬がこけているし、目に充血もある。それにクマまで」

「放っておいてください。元々こんな顔なんです」

躍起になって、顎を摘まむ七海の手をパンと払う。

「そんなわけないだろう！」

ホームにいた周りの人たちまでもが、ギョツとしてこちらを凝視するほどの大声。志緒は体にビリッと稲妻が走ったみたいにくすみ上がった。

七海は額に手を当て、小さく息を吐く。

「すまない。……だが」

グイッと志緒の手が引つ張られた。そして、七海はどこかに向かっせずんと歩いていく。志緒は引きずられるように小走りで歩きながら、「ちよつと！」と声を上げた。

「やめてください。どこに行くんですか。放して！」

「このまま放つてはおけない。いいからついて来るんだ」

そう口早に言ったあと、七海はスーツの内ポケットからスマートフォンを取り出し、どこかに電話をかける。そして志緒を引つ張ったまま地下鉄の階段を上って地上に出ると、彼は近くにあるコインパーキングに向かい、車の助手席をガチャリと開けた。

「乗れ」

「え？ きゃー！」

困惑する時間すら与えられず、志緒は助手席に押し込まれた。七海は運転席に乗り、エンジンをかける。

「ちよつと、困ります。車なんて……停めてください！」

「断る。すぐ近くだから、しばらく黙っていてくれ」

「だまつ!? あなた、私を無理矢理車に乗せておいて、黙れってどういうことですか！」

「怒鳴る元気があるなら、まだマシだな。君は自分のために、俺の言うことを聞くべきだ」

「私のためって……」

七海は一体なにを言っているのだ。志緒が戸惑う間に、七海の運転する車はビジネス街の大通りを突き進む。

そうして繁華街に入ると、景色は一気に華やかなものに変った。

志緒は思わず、街の様子に目を奪われる。

街はすっかりクリスマス一色になっていて、街路樹には美しい青色のイルミネーションが輝いていた。

七海に向けていた苛立ちが薄まり、しばしその景色に見入ってしまう。

車はやがて、繁華街の駅近くにある、巨大なホテルの地下駐車場に進んでいった。

（ん……ホテル？）

志緒は眉をひそめた。七海は黙ったまま車を駐車場に停め、エンジンを切る。

「ついでぞ」

「待つてください、七海さん。一体なにをお考えですか」

怪訝に思い訊ねると、七海はようやく、いつもの勝ち気な笑みを見せた。

「なにして。君のことだけど？」

「冗談はやめてください。私は真剣に聞いているんです」

志緒が七海を睨んで言うと、彼はチラと横目でこちらを見た。

それはひどく迫力があり、同時に色艶のある視線だった。見るものすべてを魅了するような瞳に、  
図らずも志緒の心は、ドキリと音を立てる。

「俺が、冗談を言っているように見えるのか」

低く、腹に直接響くような声色。笑みを浮かべているが、その瞳は笑っていない。

志緒は得も言われぬ恐怖を覚えた。なんだろう、この人は。とても怖くて、今にも逃げ出したいのに、魅入られてしまつて体が動かない。

七海は、フツと瞳を和ませた。ようやく志緒は、ホツとして体が弛緩する。

「河原さんの体調が心配なんだ。ここ最近の君は、本当にひどいからね」

「ひどいつて……そこまで、ですか？」

確かにクマはあるかもしれない。頬もこけているような気がする。だが、地下鉄で七海が血相を変えて腕を掴んだり、『線路に飛び込みそうに見えた』と口にしたりするほどひどくはないだろう。彼の態度はどこか過剰だった気がしてしまうのだ。

エンジンを切った車内は静かで、七海は穏やかに志緒を見つめる。

「俺は、追い詰められた人間をたくさん知っている」

それは、悲しくて辛そうな瞳。なにかをたくさん、その手からこぼれ落としたような、後悔の顔。志緒は目を大きく見開く。

「彼らと君が、重なって見えた。だから怖かった。河原さんは絶対に失いたくないんだ」

七海は運転席から降りる。そして助手席に回りドアを開けると、志緒に手を差し伸べた。

「おいで。君を案内したいところがあるんだ」

今すぐその手を払い、逃げても構わなかっただろう。しかし、志緒はおずおずと彼の手に自分の手を載せた。

理由はわからない。

もしかすると、七海が口にした『心配』という言葉が、心に響いたのかもしれない。

威圧的だし、強引極まりない人だけれど、自分を傷つけない。それは、幼少の頃から家族に虐げられていた志緒の、直感のようなものだ。

信用していいかはわからない。けれど、自分からなにかを奪ったり、ひどい言葉を投げたりはしないはず。

七海に手を握られ、志緒は駐車場からホテルのロビーに入り、エレベーターに向かった。

どこへ行くのだろう……。乗り込んだエレベーターはゆるやかに停まり、静かに扉が開いた。

そこはラウンジになっており、ふかふかの絨毯が敷き詰められている。七海は志緒の手を引き、歩き出した。

どうやらこの階は、レストランフロアのようなのだ。志緒が腕時計を見ると、時刻は午後九時を越えている。食事時を過ぎていくからだろう、客足は少ない。

やがて奥まった場所にある中華料理店に入り、スタッフに案内されてテーブル席につく。

「あの、七海さん。ここでなにをするんですか？」

「レストランに入っていることと言えば食事しかないだろう」

呆れたように七海は言ってお冷やを運ぶスタッフに「例のものをお願いします」と伝えた。

(例のもの？ なんだらう……)

お冷やを口にしてから、自分の腹に触れる。……やはり、空腹は感じていない。

「あの、七海さん。申し訳ないのですが、私はあまりお腹が減っていないんです」

「腹が減っていないんじゃない。それは、麻痺しているんだ」

ジロリと七海が志緒を睨む。

「君は栄養失調の一步手前だよ。睡眠も足りていないのだろう」

「そ、それは……。でも、栄養は取れているはずですよ」

「カロリーバーやサプリメントだけでは、栄養が足りているとは言えない」

テーブルの上で手を組み、静かな口調で言う。志緒は驚きに、息を呑んだ。

どうして、志緒がそんな食生活を続けていることを知っているのだろうか？

疑問を感じていると、スタッフが料理を運んできた。志緒の目の前に、蓋のついた白い陶磁器の

壺のようなものが置かれる。

「君みたいな顔をした人はね、大体、食生活が似たり寄ったりなんだよ」

「そうなの……ですか？」

「ああ。だから、まずはこれを食べてみるといい」

七海は、ばかりと蓋を開けた。

すると、温かい湯気がほわりと顔にかかる。ごまの香りが漂うと共に、ふつふつと泡をたてる

料理。

(お粥……だ)

少し意外だった。七海は派手好きに見えるので、もっと中華料理らしい、脂っこいものを頼んだのかと思っていたのだ。

「七海さん。私……」

「いいから、一口だけでも食べてみてくれ」

志緒は戸惑いながらも、レンゲを手に取った。

料理に罪はない。出された料理を無駄にするわけにはいかない。一口だけと思い、粥をすくう。

(あれ……思ってたより、さらさらしてる)

それは、クリームスープと間違えるほど、レンゲですくった感じが軽かった。とろりとした粥はとても食べやすそうで、志緒はふうふうと冷ましてから、口に入れる。

すると喉を通る粥はなめらかで、シヨウガの風味がどこか懐かしい。複雑な味を持つ出汁はあとを引くおいしさで、志緒は思わずもう一口と、レンゲで粥をすくった。

「お、おいしい、です」

「そうだろう？　これは、俺のとおっておきなんだ」

「とおっておきですか？」

志緒が首を傾げると、七海は「ああ」と頷く。

「二日酔いの朝は、これしか受け付けられない。体に優しい味がするだろうか？」

ぼく、と志緒は粥を口にしたら。

彼が言う通り、優しい味だ。決して薄味ではなく、体に染み入るような味がする。

「そうですね。……はい。体も、ぼかぼかします」

シヨウガがきいているからだろう。一口食べるごとに腹の中が温かくなっていく。

（不思議。お腹がおいしいもので満たされるって、こんなにも幸せなんだ）

祖母が亡くなるまで、当たり前だと思っていたからわからなかった。サプリメントで栄養を摂取しても、体に元気が出なかった理由。人間は、料理を口にしてこそ満たされる。それは体を動かすエネルギーになる。

正直なところ、まだ、食欲はない。だけど食べやすいから、するすると口に入っていく。

「うちそうさまでした」

気づけば、粥の入った壺はからになっていた。スタッフが中国茶を運び、テーブルに載せる。

ガラスのポットにはオレンジ色の花が入っていて、七海が茶器に茶を注ぐと、優しい花の香りが出た。

「これ、キンモクセイの香りですか？」

「そう。桂花茶っていうんだ。秋らしい、いい香りだろう」

茶器を志緒に渡す。志緒は受け取り、ゆっくりと茶を飲み込んだ。

「とてもおいしい……」

ほう、と心が安らぐ。キンモクセイの香り。——それは、志緒にとって懐かしい匂いだった。

祖母が好きだったのだ。秋になると、庭にあるキンモクセイの花を摘み、ガラスの花器に水で張って浮かべ、飾っていた。近づくとほんのりあまい香りがして、志緒はそれを見るたびに、秋の到来を喜んだのだ。

しかし、庭にあった見事なキンモクセイの木は、今はもうない。

祖母が病におかされ、庭木の世話ができなくなった頃、両親が業者に頼んで切り倒したのだ。妹が『臭い』と言った、それだけの理由で。

「……………」

ぐ、と唇を噛みしめると、視界が歪んだ。だめだ、と思ったけれど、遅かった。

ぼろりと涙が頬を伝う。腹が満たされたせいで、気がゆるんでしまったのだろうか。止めようと思つたのに止められなかった。

一筋の涙は、二粒目の滴を運ぶ。三滴、四滴、五滴。

「うっ……………」

ぼろぼろと涙が流れ、志緒は慌ててハンカチを取り出す。ぐしぐしと乱暴に拭くが、まったく涙

は止まらない。

嫌だ。七海の前で泣きたくなかった。しかし、キンモクセイの香りは心を解す効果でもあるのか、溢れる感情を抑え切れない。

「ご、ごめんさい。これは、七海さんのせいではありません。お気になさらず」

あくまで自分の問題なのだ。志緒はそう言って、ぎゅっと目を瞑り、なんとか涙を堪える。

七海は黙ったまま、そんな志緒を見つめていた。

「なあ、河原さん。心に抱えるものというのは、他人に話す少しは楽になるらしいぞ」

「……え？」

ぐし、と鼻を押さえていると、七海が静かに話し始める。

「話してみないか。そんな調子では、いずれ仕事もままならなくなるぞ。君もわかっているだろう？」

志緒は驚いて顔を上げ、七海を見た。彼は隣で、じっと志緒を見つめている。

その表情は真剣で、からかっているようには見えなかった。

(どうしてこの人は、こんなにも私を気にかけてくれるんだろう)

彼とは、まだ数えるくらいしか顔を合わせていないし、世間話をするような仲でもない。

しかし、まったくの他人だからこそ、事情を話してみるの妙案かもしれない。

話してどうなるというものではないが、他人に話することで、気が楽になる。そういうこともあるかな、と思った。初めて出会った時から、七海は志緒に優しかった。

志緒だって、現状のままでもいいとは思っていない。久しぶりに食事がおいしいと感じて、身に

みるようにわかった。

人が健康に生きるためには、ただ栄養を摂取するだけでは足りない。豊かな食事が必要なのだ。粥を食べたことでそれを思い知った志緒は、少しでも前に進むために気持ちを決める。

「では、お言葉にあまえて。——本当に、他人にとっては些細なことなんですけど」

志緒はそう一言断ってから、自分の事情をぼつぼつと話した。

両親のこと、妹のこと、そして祖母の死。

それは、ただ事実を羅列しただけだった。しかし、すべて話し終えると、志緒は自分の心がほんの少し軽くなったように感じた。

(ああ、本当だ。他人に話すって、ちょっと気分が楽になるのね)

もっと早く、誰かに話を聞いてもらえばよかったのかもしれない。だが、こういう話は、なかなか自分から切り出せるものではなかった。だからこそ、提案してくれた七海には感謝しないといけないな、と志緒は思う。

「七海さん。話を聞いてくださって、ありがとうございます」

志緒は深々とお辞儀をした。七海は腕を組み、なにか思案するように目を瞑っている。なにを考えているんだろうと思いつつ、カバンから財布を出した。

「それと、お料理代をお渡ししたので、伝票を見せて頂けますか」

そう訊ねるも、やはり彼は目を開けない。というより、志緒の話を聞いていないようだ。

「七海さん？」

「志緒」

ふいに七海は目を見開いた。志緒は紙幣を一枚取り出したところで、目を瞬かせる。

「はい？　というか、七海さん。今、私のことを名前で……」

「志緒。俺が、君に人生は楽しいということを教えてやる」

「……はい？」

意味がわからない。志緒が首を傾げると、につこりと七海は微笑む。

「君はね、もっと自分の人生を楽しむべきだ。今まで辛かったからこそ、これから幸せにならなければならぬ。だから俺にその手伝いをさせてくれ。いや、する。決めた」

志緒はぼかんと口を開け、七海を見つめる。しばらく頭が真っ白になって思考停止していたが、やがてハッと我に返った。

「な、なにを言っているんですか。あと、勝手に人の名前を呼ばないでください」

「これから親しい関係になるんだから、名前を呼ぶくらい構わないだろう」

「嫌です！　私はお近づきになりたくありません！」

志緒は怒鳴り、拳でテーブルを叩いた。

「だ、大体、なにをするつもりなんですか」

「それはこれからの楽しみだ。秘密にしておいたほうが、わくわくするだろう？」

「私はわくわくしません。人の人生で遊ばないでください！」

せっかく、いい人だと思いかけたところだったのに。志緒としては、ただ話を聞いてくれるだけ

でよかったのだ。これ以上なにかしてほしいなんて思っていない。

すると七海は、妙に真剣な顔になって、テーブルの上で両手を組む。

「なぜ、そこまで拒否をする？　前向きに生きたいなら、素直に俺の言葉にあまえればいいだろ？」

それとも志緒は、今のままでいいののか？」

「それは……」

もちろん、今のままでいいなんて思っていない。

いつかは克服しなければならないのだ。七海の言う通り、前向きに生きるきっかけはほしいと思っている。しかしそのきっかけは、自分で見つけ出したい。

だから志緒は、気持ちをしつかり保って表情を引き締め、テーブルに二千円を置いた。

「とにかく結構です。これ、お粥のお代です。これくらいですよね？」

「残念。足りない」

「足りない……!?　お粥一杯で一体おいくら……!?」

「そんなことより。なぜ結構なんだ。理由が知りたい」

七海はテーブルの上に置いた二千円を手にとると、開きっぱなしになっている志緒の財布にサツと戻す。そのまま志緒の手を握りしめた。

「教えてくれ。なぜ嫌なんだ」

「距離が近いです！　それならハッキリ言わせてもらいますけど、私は七海さんが苦手なんです。

だから、あまり関わってほしくないんです」

前から思っていたことを口にした。そう。志緒は七海が苦手なのだ。すると、七海は「へえ？」となぜか笑みを浮かべて、志緒の顔を覗き込む。……距離が、限りなく近い。

「つまり、俺が嫌いなのか」

「嫌いじゃありません」

「苦手と嫌いの違いが、俺にはわからない」

「私には、とても嫌いな人たちがいます。彼らは私を傷つけるし、私のものを奪う。けれど七海さんは、私からなにも奪わないし、私を虐げない。だからあなたのことは、ただ苦手なんです」

至近距離で見つめ合い、志緒の顔は熱くなってしまった。視線を避けたくて横を向く。

いつも堂々としていて、自信に溢れ、人生そのものがキラキラと輝いているような七海。彼を見ていると、自分がはじめに思えてくる。まるで、光の陰に潜む虫。ちっぽけな存在のよう。

だが、みじめな虫にだってプライドはある。この、すべての幸せが約束されていそうな男に、自分の人生を振り回されたくない。

七海は不敵に唇の端を上げ、「なるほど」と頷く。

「ようは、食わず嫌いか」

「え？」

「じゃあ、一度食べてから判断してくれ。そうでなければ俺は聞かない。というわけで、君は俺への苦手意識を克服するように」

「ちょっと、勝手に話を進めないで。あと、だから、近いんですっ！」

志緒は七海の胸を押す。こんな公（おおやみ）の場で、本当にやめてほしい。

「七海さん。私はあなたへの苦手意識を克服したいとは思いません。自分のことは自分で解決しますから、放っておいてください！」

「嫌だ。俺は君が好きだから、放ってはおけない」

「……は？」

志緒は目を丸くして、ぽかんと口を開けた。

今日は、驚かされてばかりだ。なにを言っているのだ、この男は。

志緒は思わず立ち上がっていた。

「私は、同情してもらいたくて話したわけじゃありません。そういう安っぽい言葉は嫌いです」  
そう言い放って、志緒はレストランから出ようとすする。

結局、あのおいしい中華粥（いぐ）が幾らかはわからなかったが、レジで聞けばいいだろう。

ふかふかした絨毯（じゅうたん）を歩きながらそう思っていると、うしろから手を引かれた。

「同情じゃない。これはれっきとした愛情だ、志緒」

「愛情なんて、数回会社でお会いしたくらいで芽生えるものじゃありません」

「そうかな。一目惚れだって立派な愛情だろう。運命の出会いには確かにある」

「私は、一目惚れなんて信じません」

「たえそうでも構わない。俺の君への感情は、一目惚れではないからね」

志緒は振り返った。そこには、勝ち気な笑みを浮かべる七海がいる。

立ち読みサンプル  
はここまで

「たった数回。されど数回だ。俺はあの会社で君に会うたび、思いを募らせていた」  
「なにを、言ってる……」

「嘘だと思うのか？ それなら、これから自分で確かめてみればいい」  
七海は志緒の手首を握る手に力を込めた。そして、力強く自分のほうへ引き寄せる。  
「きゃー！」

「せっかくの機会だから、同時進行で口説かせてもらおう」  
かあつと顔が熱くなった。

「これから覚悟するといい。志緒」

ねつとりと、体中に絡むような色艶のある声。こんな風に、熱く愛を囁かれたのは初めてだった。  
元敬に告白された過去はあるが、彼はもつと穏やかだった。

（本当に七海さんは私のことが好きなの？ でも、どうして）  
思い当たることが、ひとつもない。

「さあ、これから楽しい人生の始まりだ。志緒、俺は君を、存分に振り回すからな」

志緒の耳元であまく囁き、七海はようやく手をほどく。

掴まれた手首ははまだジンジンと熱を孕んでいて、志緒はそこに触れた。

「もうこんな時間だ。車を呼んでおいたから、君はそれに乗って帰るといい」

茶目つ気たつぷりに片目を瞑る。今日はずっと彼のペースだ。妙に腹が立って、志緒は唇を尖らせる。

「そんなお節介、いりません」

「お節介と言われても、心配だから引けない。ハイヤーを使わないのなら、俺が直接送る」

「困ります！ やめてください」

志緒が声を上げると、七海はニツと笑みを浮かべた。吊り目もあいまって、とても獐犢に見える。

「なら、大人しく俺が手配した車で帰るんだな」

「うう」

なんて勝手な人なのだ。志緒は唇を戦慄かせて、七海を睨む。彼はおどけたような表情をした。

「普段のすまし顔が嘘かと思うくらい、今日は表情がくるくると変わるね」

彼はまるで悪役のように、ククと低く笑う。

志緒は言い知れない恐怖を覚えた。七海のペースに巻き込まれたくないと思っていたのに、気づけばしっかりと術中に嵌まっている。

（なんなのよ……この人は）

こういうところが苦手なのだ。だから構わないでほしいのに。

志緒は心底困り果て、眉根を寄せた。